

「神に召された望み」

エペソ人への手紙 1 : 17 - 19

March.13.2022

エペソ人への手紙 1 : 17 - 19 (パウロ)

Preface

先週は、「知恵と啓示の御霊をお与えくださるように」という使徒パウロの祈りの内容について学びましたが、なぜ、知恵と啓示の御霊を求めたのかと言いますと、(18節以降にありますように、)心の目がはっきり見えるようになって、3つのことを明確に知ることできるよという願いからでした。

一つ目は、神がどういう目的と目標をもって、私たちに召し出したのかを知ることが出来るように。

二つ目は、私たちが相続するものが、どれほどにすごいものであるかを知ることが出来るように。

三つ目は、キリストを信じる者とされたこと自体が、もうすでに、偉大な神の力が働いていることを自覚できるように、という三つの願いのために、パウロは知恵と啓示の御霊を求めました。

そして今朝は、一つ目の願い、神がどういう目的と目標をもって、私たちに召し出したのかについて考えていきたいと思います。

まず18節の、

エペソ人への手紙 1 : 18 (パウロ)

「神の召しにより与えられる望みがどのようなものか」という言葉の意味するところが何なのかを明確にしたいと思います。

この日本語訳ですと、あたかも「神様の御前に召し出された者たちが抱くことの出来る望み」というように、私たち側の望みを意味しているように見えます。

ところが、原文のギリシャ語や、または前後の文脈から考えますと、神に召し出された私たち側の望みではなく、「神様の望み」と取る方が妥当に見えます。

つまり、英語訳聖書のように「神様があなたがたを、どういう望みまたは期待をもって呼び出したのかを、あなた方が知ることが出来ますように」と訳した方が的確だと思えます。

先週まで話してきましたように、17-19節のパウロの祈りの要点は、「神様を知れるようにしてください」というものです。 また、二つ目の願いとして18節の後半部分には、「聖徒たちが受け継ぐものがどれほど栄光に富んだもの

か」という私たち側が抱ける望みについての祈りが続いていることから、私たち側の望みという同じ内容を重複させる必要はありません。

初っ端から少しややこしい話になってしまいましたが、つまりは、「どうして神様が私たちを召し出し、どのような期待と望みを持っておられるのかを知っていて欲しい」というのが、パウロの要求であり願いでした。

Part One

神様がどういう期待、望み、目的、目標を持って私たちを召し出したのかを考える時、まずパウロが、エペソ教会の聖徒たちに知っていて欲しいと思ったことは、私たちに与えられた信仰は、信じる私たちに主体性・主導権があるのではなく、信じる対象に、つまり神様に、主体が、主導権があるということです。

イスラエルの奴隷という身分から救い出されたイスラエルの民たちが彷徨ってしまった最たる理由が、神を信じるということにおいて、その主導権を、主体を自分たちにおいてしまったということです。

主が何を望み、何を期待しておられるのかに応える生き方ではなく、自分たちの望みと期待を追い求め、結果的に彷徨ってしまった40年でした。

第一コリント10章を見ますと、「今を生きる私たちのために、神様は彼らイスラエル民族を反面教師としてくださった」と、パウロが教えてくれます。

私たちの信仰において、どんな面で最も多く失敗するかと言いますと、私の信仰の鍵は私の手の内にあると思ひ込み、実際に、その鍵を手のうちに握りしめていることです。

しかし、信仰とは誰かの手の内にあるものではなく、信仰の内容そのものであれ、信仰の対象であられる主なる神様に向かうものです。

「果たして私は、私を呼びだした方の期待に添うために、その命令に、その教えに従って人生を生きているだろうか？ もしくは、私の人生は私の人生で、私なりに私の思うように生きながら、イエス・キリストを信じていると騙されてはいないか？ 欺かれてはいないか？を一度見極めてほしい」という要求が、パウロの祈りには込められています。

イエス・キリストを我が救い主と信じるように召し出された者たちには、将来成る約束された祝福があります。

天の御国に行くこと、栄光の姿に変えられること、二度と悲しみや痛みの涙を流すこともなく、死もなく苦しみもないところへと行くこと、一点の闇もない栄光に満ちた透き通ったガラスのような純金に満ちた都に入ること、朽ちない冠を受けるとい希望がありますが、

その将来の事ばかりに思いを馳せる生き方ではなく、今というこの時に、この地上で、その置かれた人間模様の中で召し出してくださった主なる神様の目的と期待が何なのかを知って欲しいというパウロの願いが、彼の祈りに表れます。

Part Two

私たちの信仰生活の中で陥りやすい誤解がありますが、それは、「罪を犯すことこそ信仰に反することだ」ということです。

もちろん、罪を犯すことは、信仰とは真逆のことではあり褒められたことではありませんが、罪を犯すことは、私たちにとっては、さほど大きな懸念事項にはならないことがほとんどです。

なぜならば、キリストの霊に触れられ、キリストに出会った者たちは、「罪が悪いことだ」ということを誰もが知っているために、避けようと、罪を犯さないようにしようと努めるからです。

努めているがために、たとえ罪を犯したとしても、「悔い改めたい」という思いに至ります。

それよりも、実のところ、クリスチャンにとって、罪を犯すことよりも陥りやすい信仰に反する大きな問題は、それ自体は罪とは言えないけれども、結果的に、神に期待されていることとは逆のことを犯してしまっていることです。

例えば、勉強がすべてだとは私自身思っていないですが、ひとまず、どんな種類の学校に通っていても、その学校に通っている学生にとっての本分は学業です。

しかし私自身そうでしたが、勉強する時間や授業中に、漫画を読んだりゲームにふけっていることはしてはならないことですし、バレたら叱られます。

授業中に早弁をする強者もいましたが、当然バレたら怒られますし、学業という本文を果たすことから逸脱した行為です。

そこで留まればいいものを、叱られた腹いせに、今度は、スーパーで万引きまでしてしまったとしたら、勉強する時間に他のことをしていたという罪ばかりか、そこに今度は倫理的な、社会的な罪まで上塗りしてしまうことになります。

私自身、小学生の頃、友達に誘われてスーパーで万引きをして、バレてこっぴどく叱られたことがあります。が、学生の本分である勉強をする時間に他のことにふけっていることは、明らかに本来の本分と目的を逸脱した行為になります。

明確なルール違反です。

そこで今度は、「怒られたくないから、僕は授業中ゲームもしないし、早弁もしないし、万引きなんかないけれども、勉強する時間に勉強するのはかったるいから、ただボーッしながら過ごしたいと思います。

他人の迷惑にはならないからいいでしょ」と言っても、そうはいきません。

なぜなら、勉強する時間に勉強に励んでいないということは、学生としての本

分・責任を全うしていないということになりますから、結果的にこれもまた、ルール違反、期待されていることとは真逆のことをしてしまっていることになります。

ただジッとしていればいいというわけではなく、勉強する時には勉強してこそ、学生としての本分を果たせます。

今、使徒パウロがキリストを信じる者たちに要求し願っていることは、「明らかな罪を犯さず、ただ生活していればいい」という風情も面白もない消極的な生き方ではなく、何ゆえに、どんな目的をもって、どんな望みと期待を持って、神様があなたがたを召し出したのか、その本分を知っていて欲しい」ということです。

「ただ、ジッとしていればいい」というわけではないということです。

ルカの福音書に行ってみましょう。

ルカの福音書 21 : 34 (パウロ)

主イエス様が再び来られるその日を準備しなさいという警告の中で、「放蕩や深酒や生活の思い煩いで心が鈍くなり、その日を、準備なく思いもかけない形で直面することがないように、気を付けなさい」と諭します。

ところが、ここで興味深いのは、放蕩や深酒とともに、生活の思い煩いという項目が入れられているということです。

生活の思い煩いは、それ自体が罪ではありません。

一方、放蕩と深酒は、それ自体良いことではありませんし、怒られ叱られ注意されて当然のことでしょう。

なのになぜ、生活の思い煩いが、放蕩や深酒と同列に並べられているのか？何でここにはめ込まれているのかということです。

放蕩とは、放蕩息子の例えにもありますように、何か悪いことをするという以前に、浪費するという意味です。

無為に歳月を送ることです。

つまり、ストレートに言うならば人生を浪費していること、その人に与えられている才能・能力・機会を浪費していること、これが放蕩ですね。

私たちが、神様に召し出された者に似つかわしく生き、主が再び来られるその日まで準備しなければならない時間を、他のことに浪費していること、これをイエス様は放蕩とおっしゃいます。

出て行って、自分の目に正しいと思えること、自分の心の赴くまま、世の常識や人の作りだした価値観や世界観に従って生きることばかりで、主が来られるその日を準備することが出来ていないとおっしゃるのです。

深酒もこれと同じです。

酒を飲めば、始めのうちはその人が酒を飲んでいますが、そのうち酒が酒を飲み、酒が人を飲むようになります。

ついには酒が、その人を手中に治め、私たちを完全に驚づかみにして、気を真っすぐにすることが出来なくなるほどに揺るがします。

ここでこの意味を的確に捉える必要がありますが、酒をひどく飲むことだけが深酒ではありません。

聖書の教える聖なることとか、敬虔なことのような神の御思いを求めて生きることに関心するのではなく、それ以外のことに心が捕らわれている状態を「深酒だ」とイエス様はおっしゃいます。

何かが、その人のことをむんずと掴んで離しません

本分を忘れさせ、期待され望まれて、元々やらなければならないことを出来なくします。

このような点において、生活の思い煩いは、放蕩するとか、深酒するとかということと同じです。

この世界に適応して生きることだけに躍起になって、世が求める価値基準に沿った体面を整え、自尊心を育てることばかりに忙しくして、気を取られ、ついにはその生活の思い煩いに捕らわれて、永遠のための準備と、聖なることや敬虔なことのために時間を使うことを忘れてしまっているという面で、全く同じです。

万引きとか、放蕩とか、深酒は、一目瞭然良くないことです。

でも、生活の思い煩いは、一見すると良くないことでもなく、倫理的に、道徳的に大きく外れていることでもなく、頑張っているように、必至に生きようとする努力のように映りますが、もしそれが、神に召し出されている本分を、目的を、期待を、望みを、神の国を準備することを忘れさせているならば、やはり良くないことですし、放蕩や深酒と同列に並べるべき項目になります。

一見するとそうは見えないけれども、立派な罠です。

このことについて、単刀直入に言っている聖書箇所がありますので、見たいと思います。

マタイの福音書です。

Part Three

マタイの福音書 13 : 22 (パワポ)

何故に、実を結べないと言っていますか？

この世の思い煩いと富の誘惑が、御言葉をふさぐためです。

この世の思い煩いと富の誘惑のために、その人の内で、御言葉が育つ余地がないんです。

その人に与えられている、期待されている、望まれている命と御言葉が、育つ余地が無いんです。 この世の思い煩いと富の誘惑のためにです。

なぜ、こんな耳の痛い話をしなければならないのかと言いますと、信仰とは、私がやりたいことをやりたいようにすることではないことを明らかにするためです。

神様が求めておられることをやることが、信仰です。

でも、私たちが信仰と言いますと、私たちがやりたいことを、やってくくださる期待へと向かいます。

私の病気が治ること、給料が上がること、私たちの悲しみや災いが転じて福になること、これらすべてのことが、世の・生活の思い煩いと結託してはいないだろうかと、いつも見定めなければなりません。

これこそが、「神に召された望みを知るようにしてください」と使徒パウロが、祈りの目録に入れた理由です。

生活の思い煩いに驚づかみにされますと、お金が私たちの最高の武器になってしまいます。

どれだけ私たちがお金にがっしり掴まれているかと言いますと、「金銭を愛することが、あらゆる悪の根だからです」と、聖書でいう程です。

イエス様でさえ、私たちが神を信じる事が出来ない最も大きな唯一の理由を、サタンの仕業とか、何々教の教えのためだとか、科学技術や文明の発展のためだなんてことは一切おっしゃらず、至ってシンプルに、「富のせいだ」と仰いました。

人が神を知ろうとしない最も大きな唯一の理由は、「お金だ」と仰いました。

ぶっちゃけ、私たちが最も望むことは何ですか？

主なる神様を、イエス・キリストを知ることを願っていますか？

もしくは、主なる神様を知るけれども、どのようにすれば、主がお金を下さるのかという方法を知りたいですか？

または、神様の下に来て跪き、主を探し求める理由は、主が、この世の、または生活における問題を解決してくくださることを望んでおられるからですか？

残念ながら、現実問題、私たち、そのために神様を探し求めています。

Part Four

信仰は、私が信じているわけではありません。

一義的に、神様が、神様ご自身を私たちに現し、私たちを掌握されました。

それだけでなく、私たちの人生の目標と要求と、すべてのことにおいて命令を下すことがお出来になるお方です。

そのようなお方が、私たちを召し出しました。

だから、跪いて、「主よ、お話してください。しもべは聞いております」という姿勢で生きているかを自ら調べるのが、召された私たちに主が望んでおられることです。

第一テモテ 6 章を見てみたいと思います。

今お話ししましたことを赤裸々に語っています。

テモテへの手紙第一 6 : 6 - 1 2 (パワポ)

神様は、私たちを何のために召し出しましたか？

私たちは、何のために召し出されましたか？

“永遠のいのち”、こういうことのために、私たちは召し出されました。

だから、それを練習していく必要があります。

義と敬虔と信仰と愛と忍耐と柔和を追い求めながら練習し、信仰という善なる戦いを立派に戦い、永遠のいのちを獲得しなければなりません。

この練習に励むことなく、無意味にもお金を愛し、自ら誘惑と罠に陥ってはいないでしょうか？

「いやいや、そんなお金持ちではありませんよ」と私たちと思いますが、私自身、3年間の家族6人貧乏アメリカ生活で、どれだけお金を偶像にして生きてきたことか、どれだけお金に心を驚づかみにされていることかを突きつけられました。

私たちの笑いと涙が、聖なることや敬虔なことによるのではなく、景気に左右されます。

もちろんだからと言って、お金持ちになることがいけないとか、株式投資することが罪だとか言っているわけではありません。

正当な投資や経済活動は、社会や企業をがっちりさせるなど、良い面もたくさんあります。

問題は、その動機がどうなのかということです。

正当で、誠実で、聖なる動機がそこにあるのかということです。

一攫千金を狙って、富を手中に収めたくてしているならば、毎朝、新聞の株式欄を見る度に、ネットで社会の動向を見る度に、笑ったり、泣いたりすることでしょう。

義とか、敬虔とか、信仰とか、愛とか、忍耐とか、柔和のような聖なるものが、私たちが笑わせ泣かせるのではなく、世の動向が、私たちの笑いと涙を支配しているということを明確に認識する必要があります。

そんな戦いのために、私たち呼び出されたのではないですね。

神様は、私たちを通して、私たちの存在と人生を通して、永遠のいのちに関すること、天の祝福に関すること、愛と義に関する証しをもって、人々に主イエス様の救いが広く広く宣べ伝えられることを願っておられますが、

果たしてその事のために、私たちは、神様がお使いになる相応しい器なのかを私たち自ら確認すること、これが、神が召し出した望みを知ることです。

ペテロの手紙第一 2 : 11 - 12 (パウロ)

私たちは、今、この世に安住する者たちではなく、旅人であり、寄留者です。

だから、「私たちの魂に戦いを挑む肉の欲を避けながら、旅人であり寄留者であることを自覚する人生の中で、私たちの生きる姿を見て、唯一の神を知らない人々が神を知れることに熱心な者でありなさい」と言います。

これが、キリストにある聖徒たちの人生であり、神が望んでおられることです。

Missio Dei 神の宣教のために、私たちは生かされ、生きています。

このための戦いであって、生活の思い煩いのための戦いではありません。

それゆえに、悪に悪をもって返さない練習をするんです。

敵が渴いている時、腹を空かせている時、飲ませ、食べさせる義なる戦いをするのです。

批判や要求する代わりに、包むのです。

そして、もし批判したならば、その批判に釣り合う立派なふるまいと行いを練習するんです。

そして、それらの行いは、倫理道徳的に素晴らしい善行という私の徳とか功績にする次元の話ではなく、永遠のいのちという霊的な事であり、聖なることであって、キリストを褒めたたえ、崇めることに繋げ、繋がるのです。

Conclusion

最後に、ローマ書 12 章です。

ローマ人への手紙 12 : 1 - 2 (パウロ)

私たちのからだで、その生き様で、生きたささげものを献げるのです。

言葉や考えではなく、からだで表し、生きるのです。

私を呼びだしたお方が、今日私に何を望んでおられるのか、この世と調子を合わせるのではなく、神様に喜ばれること、良いと思われること、完全なものを毎日見分けるのです。

そのために御言葉を頂かなければ今日を生きられない、もし神の御言葉なしに今日を生きているとしたら、私たちは私たちの人生を、私たちの気ままに、私たちの満足のために生きているのであって、神様の召したその目的に、御旨の満足のために生きる 1 日ではないことになります。

キリスト者の栄光は何でしょうか？

どれだけ収入が多いのか、どれだけカッコいいのか、どれだけ社会的に認められているのか、どれだけ健康なのか、でしょうか？

どれだけ神様が、その人の人生を通してお働きになることが出来るのか？

どれだけ神様と密接な関係を持てているか？

これが、私たちの栄光です。

使徒パウロは、召し出された神の望みに一致する人生を生きるための発奮と決心を、私たちに求めています。

お祈りいたします。

祝祷：テモテへの手紙第一 6：11